

E. Dickinson: *There's a certain Slant of light,*
における絶望の意味

後 藤 廣 文

258

There's a certain Slant of light,¹⁾
Winter Afternoons—
That oppresses, like the Heft
Of Cathedral Tunes—

Heavenly Hurt, it gives us—
We can find no scar,
But internal difference,
Where the Meanings, are—

None may teach it—Any—
'Tis the Seal Despair—
An imperial affliction
Sent us of the Air—

When it comes, the Landscape listens—
Shadows—hold their breath—
When it goes, 'tis like the Distance
On the look of Death—

I

この詩は、意味の強調された大文字の語のみに限定してみても、二重母音、長母音が多用されており、暗く重い感じを与える詩だが、これが不規則な意味のまとまりと、第3連に見られる韻律の乱れと重なって、話者の心の動揺と絶望を浮き彫りにする。一般的に意味のまとまりは、連とか、あるいは、全体としてバランスのとれた行で成されるものだが、この詩では第1連と第2連1行目が1つのまとまった意味を構成している。この不規則性は、話者の意識の内にある自然と、現実の自然とのずれによって引き起こされる話者の驚き、心の動揺を強調するものである。この詩は、強弱調で、基本的には、奇数行が擬似押韻を踏み4詩脚、偶数行が3詩脚であり、第1・2連は強音節で終るが、第3・4連の奇数行が弱音節で終り暗いリズムとなりこの詩の絶望の内容を支えている。第3連は4行共に3詩脚で、奇数行の擬似押韻もなく、特に、第3行は8音節で余剰が2つあって韻律が乱れ、しかも、いずれも単母音である。これは、追いつめられた話者の絶望の深まりと緊密な関係にあり、意図的に成されたものである。

こういった音やリズムに表された暗く重い感じが、冒頭行の太陽の持つ死の metaphor と重ね合わされるのである。冬の午後の太陽の光のあり方を「斜めの光」と表すのだが、具体的には、夏に比べ冬の太陽の作る物影が長くなることを示すものである。この力の衰えた冬の太陽が、次の行の葬送の調べと相まって、死の metaphor となるのである。冬の午後の太陽は沈むのが早く、やがて訪れる夕暮と闇、つまり日没と太陽の死が暗示されるのである。これが、最終連2行目に示唆される夕暮と3行目の日没、そして、最終行の死へと収れんして行くのである。自然の時間的变化と話者の内面の変化とが重ね合わされるのである。従って、この詩は死を扱った詩と言えるであろう。キリスト教信仰者にとっては、死は新しい生の始まりであり、永遠の獲得のはずなのだが、最終連最後の2行に見られるように、話者は、新しい生の獲得を拒否されているのである。これは話者の絶望の極みを示すものだが、この絶望は、第2連での拒否、第3連での拒否と、次々に拒否されて行った果ての絶望なのである。第1連と第2連1行目に話者の自然に対する共感が表されているのだが、それは、「斜めの光」が話者に「天の傷」を与えるという表現に示されている。「天の傷」とは難解な表現であるが、人間は死すべき運命にあるという内容を伝える句で、話者は「斜めの光」の中に人間の死すべき運命を見、死を覚悟し、その後の永生を期待するのである。ここには、自然は神の代理人だとする考えがあり、これはⅡで述べるように、Ralph Waldo Emerson の自然に対する考え方と共通するものである。しかし、この話者の死後の永生に対する期待も、直ぐ次の行で、自然の中に「その傷跡が見つけれない」と否定され、その望みが断たれるのである。「天の傷」は死と死後の永遠を表し、その具体的な証が「傷跡」なのであるが、それが自然の中に呈示されないまま、話者はその手掛かりを断たれ、拒否されるのである。また、第3連の死後の永遠は「誰にも教えられない」という表現によって、話者はその手掛かりの一切を失ってしまい、不可知の中に封じ込められてしまい、絶望に陥るのである。このように二度にわたって拒否された上に、最も重大な死の意味をも拒否されて、話者は絶望の淵に立たされるのである。死後の永遠の拒否はキリスト教の死生観の崩壊を示すものである。かつて確固としてあったピューリタニズムが揺れていることは、「天の傷」に象徴的に表されていると考えられるであろう。この意味で Emily Dickinson は現代人の資質を持った詩人であると言えよう。R. W. Emerson 流の考え方を第1連及び第2連1行目の中に見たが、詩中の3回の拒否は、結局、R. W. Emerson の考え方に対する拒否となり、これは彼を含めたロマン派からの離脱を示し、ここにも、E. Dickinson の現代性を見ることができる。

Ⅱ

「冬の午後にはある斜めの光がある」(‘There’s a certain Slant of light, / Winter Afternoons—’) ということは、冬の南に傾いた太陽が作る物影の長さによって具体的に実感される。これは1つの自然の風景を捉えたもので、ニューイングランドという土地柄を考えれば、恐らくは雪に覆われた自然の中に立つ木の作る長い影を想像させる表現である。一般に太陽は生命原理を表すものであり、冬の太陽は夏のそれに比べてその光が弱く、季節、つまり、自然の推移から考えると、死を予想させるものがある。因みに、上で想像した雪は死の metaphor ²⁾でもある。従って、冒頭2行には死の metaphor があることになり、その為に「斜めの光」が人の心に重くのしかかる(‘That oppresses,’ l. 3) のである。故に、

この行から次の行にかけての 'the Heft / Of Cathedral Tunes' は葬送の調べということになる。'Heft' は「重さ」を示す語で、「大聖堂の調べ」の重々しさを表す。太陽の持つ死の metaphor と重なって、葬送の調べとなるのだが、この死を知らせる「大聖堂の調べ」の重々しい、悲痛な響が 'oppresses' の具体的な意味として表されている。つまり、'There's a certain Slant of light, / Winter Afternoons—' という1つの自然現象の中に、話者が感じ取った死の悲しみが 'the Heft of Cathedral Tunes' で具体的に示され、その為に「斜めの光」が人の心に重くのしかかるのである。抽象的な意味しか伝えない自然現象を具体的な感情でみごとに説明していると言えよう。また、このように、自然現象の中に人間の感情を移入できるのは、自然と人間との間に対応関係があるとする考え方に基づくもので、これは詩人にロマン派的な資質があることを示すことになる。自然と人間との間に対応関係があるというのは、R. W. Emerson の考え方で、彼は、また、自然は神の意志の実現されたもの、つまり、自然は神の意志を伝える神の代理人だと言う³⁾。この考え方が詩中に反映されていることは充分考えられる。彼は E. Dickinson の先輩詩人であり、その影響は当然あると考えるのが妥当である⁴⁾。さて、この連の最後にもう一度 'Slant of light' について考えてみたい。'light' は1つの自然現象を生み出す太陽の光だけでなく、当然のことながら霊的な光でもある⁵⁾。こう考えると、冒頭1行目の [s] の頭韻には、霊的な光を息を殺して、じっと見つめる話者の様子が込められていると考えられる。'light' が霊的な光だという解釈は、次連の1行目の 'Heavenly' という語によっても証明される。しかし、この霊的な光である「斜めの光がわれわれに天の傷を与える」('Heavenly Hurt, it gives us—') という表現には、読者であるわれわれの期待を裏切るものがある。本来天は喜びと同義語のはずなのに「傷」と結びつけられている。このように相反する意味を持つ語を並べて使うことを oxymoron と言うが、両語は、その上に、[h] の頭韻を踏んで強調されている。oxymoron という観点から考えると、まず、'Heavenly' が「この上ない」という意味となり、これが 'Hurt' という語に内包される痛みの感覚を強調することになる。勿論、oxymoron の効果は後に述べるように単なる強調だけに終わるものではない。次に、この2語を前述の太陽に重ねると、生命原理としての太陽の力の衰えが「天の傷」として表されていると考えることができる。しかし、'light' を霊的な光と考えた場合、'Heavenly Hurt' は文字通り天が傷ついていることになる。この解釈はキリスト教そのものの衰退を示唆することとなり、受け入れられない解釈となろう。しかし、極めて暗示的な意味ではこの解釈も成り立つと思われる。これについてはⅢで論じたい。従って、'Heavenly Hurt' は天が傷ついているということを表すというより、次に述べるように地上にいる話者の内面的苦痛を表すことになる。つまり、「斜めの光が天の傷を与える」とは、「斜めの光」の持つ死の metaphor を重ね合わせると、神は人間に死という運命を与えるという考えが表されたものと解釈できる。この表現は話者の天に対する認識を表したもののなのである。死はすべての人間にとって苦痛であり、恐怖である。この詩が 'We' や 'us' と複数形で語られる理由でもある。特に、*I heard a Fly buzz— when I died—* (465) 等の詩に見られるように、死を知ろうとし、死と格闘した詩人であれば、死は正に精神的苦痛の根源ということになる。しかし、死はキリスト教の死生観からすれば、新生の為の通過点である。従って、死は苦しみであると同時に喜びでもあるという ambivalent な関係が、'Heavenly Hurt' という oxymoron の表すものである。つまり、'Heavenly' には死後の再生、永遠への期待が込められていることになり、'Hurt' には、その為の死の苦しみが表されていることになる。従って、死後

の永遠への期待が霊的な光に込められ、その準備としての死の苦痛が‘Slant’という語で表わされるのである。この章の冒頭で太陽を生命原理と考えたが、太陽は生と死の循環の象徴でもあり、こう考えれば太陽は再生の metaphor でもある。しかし、この永遠への期待も、次の行の「傷口は見えない」(‘We can find no scar,’) という表現によって裏切られる。従って、I で述べたように、内容的には第1連と第2連1行目が1つであり、今述べた2行目が転機となって、3・4行以下の変化が生じる。この不規則な意味の切れ方が、第3連の韻律の乱れとつながって、話者の精神的動揺の大きさと、絶望の深まりを強調するのである。「傷口は見えない」という表現は永遠への第1の拒否を示す。‘scar’は‘Hurt’の具体的形状を示すはずのものだが、‘no scar’という表現によって、その「傷口」が具体的に見えないことを示す。つまり、霊的な光が死後の永遠を具体的に表わさないことを示すことになる。この死後の永遠への拒否が、話者に大きな深い精神的傷をつけることになるのである。‘Slant’や‘Hurt’に内包された生そのものの苦しみに耐え、死の苦しみをも覚悟して、再生を願う話者の望みは断たれ、絶望と言ってもいいような深い悲しみに打ちひしがれる話者の姿をここに読み取ることができよう。また、第1連で述べた人間と自然との対応関係の崩壊がこの「傷口を見ることができない」という表現の中に見られる。‘Slant of light’や‘Heavenly Hurt’に死すべき運命にある人間の苦しみを見たように、自然が神の代理人であれば、死後の永遠も‘scar’として具体的に自然が見せてくれるはずである。しかし、死後の永遠のしるしを自然の中に見ることができないのである。次の2行(‘But internal difference, / Where the Meanings, are—’)をこの自然と人間との対応関係を基にして考えると、一切の意味がある自然の中には変化は見られないが、話者の心の中には変化が生じているというように解釈できることになる。従って、‘Where the Meanings, are—’は‘[Though there is no difference] Where the Meanings, are—’と paraphrase できよう。つまり、この行は前々行の‘We can find no scar,’の言い換えであり、自然の中には一切の変化が表れないことを示す。逆に、自然の中に永遠を見ることができない話者の心の中に大きな変化が生じるのである。ところで、‘difference’という語は「違い、差異」を示す語であるから、これによって、話者の自然に対する異和感が表されることになる。話者はこれ迄自然に対して抱いていた親近感を失い、異形の自然を認識せざるを得なくなるのである。つまり、親近感からよそよそしさへの‘internal difference’であり、話者が自然を距離をおいて眺めることを示唆する。つい今し方、自然の中に見ていた人間との対応関係が、話者にとって既に過去のものになってしまっているという時間的な距離を示すことになる。自然の持つ意味そのものが話者の心の中で消滅したのに、自然は厳然としてそこにあるという話者の自然に対する異和感、あるいは、自然からの孤立感が‘Where the Meaning, are—’の現在形で強調される。しかし、それでも尚、死後の永生をかい間見させてくれるかもしれないというかすかな望みを自然に託す話者の ambivalent な気持が、‘Meanings’と‘are’との間にある comma に表されているのかもしれない。この話者のかすかな望みは最終連の自然描写の中にも見られる。さて、先程まで信じていた自然が今信じられない話者は、精神分裂の状態にある。これは、勿論、自然と人間との対応関係の分裂によって引き起こされたものであると同時に、この対応関係の中に話者が見ようとしたキリスト教の死生観の崩壊によって引き起こされたものでもある。死と永遠は不可分の関係にあるはずだが、唯一人キリストのみが、死と復活を実証しただけである。つまり、死と死後の永遠は人知の及ぶところではないということが次連1行目の「誰もそれを教えることはできな

い」(‘None may teach it—Any—’) で表される。‘it’ は霊的な光の代名詞であり、ここでは死後の永遠を示唆する。この行と次行の ‘Seal’ という語には、*The Revelation of John* (ヨハネの黙示録) 第4章から第8章 (The opening of the sealed book) の巻物に施された7つの封印の allusion があると考えられる。⁷⁾ 特にその第5章

Then I saw in the right hand of the One who sat on the throne a scroll, with writing inside and out, and it was sealed up with seven seals. And I saw a mighty angel proclaiming in a loud voice, ‘Who is worthy to open the scroll and to break its seals?’ There was no one in heaven or on earth or under the earth able to open the scroll or look inside it. (1—4 節)⁸⁾

が本詩に関係する部分であり、その内の一番最後の「この巻物を開いて、それを見ることのできる者は天にも地にも地の下にも一人もいなかった」が、‘None may teach it—Any—’ と直接関係する。尚、この7つの封印を「イメージ・シンボル事典」は、キリストの生涯における7つの出来事、受肉、洗礼、受難、冥界下り、復活、昇天、聖霊の降臨を表すと説明している。つまり、上の引用からわかるように、復活、即ち、死後の永遠は人知の及ぶところではないということが、‘None may teach it—Any—’ の意味だと考えられる。しかし、‘—Any—’ の使い方はあいまいだ。‘Any’ は ‘teach’ の直接目的語か、それとも、‘None’ と同格の主語なのか明確ではない。目的語で考えた場合、1. None may teach it—[to] Any [one else]— (誰も他の人にそれを教えられない) と paraphrase することができる。主格の場合は ‘None’ の強調となり、2. None may teach it—[not] Any [one]— (誰もそれを教えられない、誰一人として)、あるいは、3. None may teach it—[not] Any [thing]— (誰もそれを教えられない、いかなるものも) が考えられる。しかし、3. の「いかなるものも (教えられない)」という解釈は既に ‘We can find no scar,’ (St. II, 1. 2) に表されており、自然も教えられないということの繰り返しとなり、強調としての効果は薄れることになる。また、‘Any’ を副詞と考え、‘—[not] Any—’ (いささかも) とすることもできる。‘Any’ に関してはその他の解釈も可能であろうが、1. の解釈はそれぞれの人間の孤立感を表し、2. は人間はいかなる人であっても教えられないことを示し、黙示録の allusion と一致することになる。従って、2. の解釈が正しいとすることもできるが、1. の解釈も捨て難い。この解釈は、それぞれの人間が死生観を自信を持って語れない状態を表し、確固とした共通の価値観を持ち得ない人間の孤立化への兆しを示すからである。さて、次の行の「それは絶望の封印」(‘’Tis the Seal Despair—’) の ‘Seal’ は今述べたように、復活、即ち、死後の永遠は人知の及ばないことを端的に示す語ということになる。これは死と死後の永生を求めて止まない話者にとって、正に、‘Despair’ の宣告となり、話者のあれだけ強く望んだ死後の永生への期待を封じ込めたことを示す。これは、自分の力ではどうすることもできないという話者の無力感、虚脱感を示すと同時に、話者の絶望の深さを表すことになる。‘Slant’ や ‘Heart’ に内包された生きることの苦しみ、死後の苦しみの覚悟も、結局は、無駄であることになり、話者の生の意味すらも否定されかねないことになる。この話者の絶望には実に重いものがある。この絶望が話者の内面にしっかりと定着し、いやしようもない深い心の傷となって残ったことが、次の2行の「空から送られた至高の苦悩」(‘An imperial affliction / Sent us of the Air—’) に表される。‘imperial’ には「至高の」という意味があり、‘affliction’ (「苦悩」) を強調する語である

が、‘... of the rank of ... supreme ruler : ...’¹⁰⁾の意味もあり、至高の存在である神を示唆する語でもある。従って、‘imperial’には‘Heavenly’ (St. II, 1. 1)と同様の意味が内包されており、‘Heavenly’と‘Hurt’がそうであったように、‘imperial’と‘affliction’はoxymoronである。‘Heavenly Hurt’が死という神が人間に与えた苦悩を示すのに対して、‘imperial affliction’は神が死後の永遠の秘儀の開示を拒むことを示す。これは、既に述べたように、話者の内面的苦悩の深まりをわれわれに伝える。また、‘affliction’には、‘the cause of continued pain or distress of body or mind (as illness or losses); ...’¹¹⁾の意味があり、これによって、話者の喪失 (losses) による精神的苦悩が示されている。従って、この語には、自らの努力では死後の永生を獲得できないという話者の絶望と死生観の喪失が込められていることになる。これは、‘internal difference’ (St. II, 1. 3)の具体的意味であり、永生を獲得できなかったという話者の体験が後戻りのきかない深い心の傷、つまり、苦悩を話者の意識の中に植えつけるのである。死生観の喪失は、いわば、identityの喪失であり、それを取り戻すか、あるいは、新しい価値観を創り出さない限り、話者の意識は分裂し続けるのである。自己意識の分裂は病的症状であり、これが‘affliction’のもう1つの意味 *illness* の表すものである。話者は、精神的苦痛を受けただけでなく、心が病むことになるのである。これは現代人の持つ悩みと同質のものである。ところで、‘imperial’は、上に述べたように、神を示唆するので、この語には、‘Heavenly’に死後の永遠への期待が込められていたように、神の啓示への秘かな期待が込められている。自らの力では獲得できない死後の永生も、霊的な光が教えてくれるかもしれないという話者の最後の望み、期待が、再び、自然への関心を呼び起し、最終連へとつながって行くのである。また、霊的な光を地上に届けるのが‘the Air’なので、‘Sent us of the Air’と表現されるのである。「空気」は自然の1つであり、ここでは霊的な光の媒体である。つまり、‘imperial’と共に、‘the Air’という語を使うことによって、話者の心の中で既に異形となってしまった自然に、それでも尚、話者は最後の望みを託そうとするのである。さて、最終連最初の2行「それがやって来る時、風景は耳をそば立て、影は息を殺す」(‘When it comes, the Landscape listens—/ Shadows—hold their breath—’)では、自然が擬人化されている。これは、話者の自然に対する感情移入であり、話者と自然が一体となって、つまり、一切のものが、死と死後の永遠を知ろうと、耳をそば立て、息を殺すのである。もっとも、自然が擬人化されるのは、前に述べたように、自然は神の代理人であるという考え方が基本にあるからである。しかし、自然は、ここでは、話者と同じであり、神の代理人としての役割はこの詩の冒頭程に期待されてはいない。ところで、‘When it comes,’の‘it’は冒頭行の‘a certain Slant of light’の代名詞だから、本来は視覚で捉えられなければならないものののに、‘the Landscape listens’と聴覚が使われている。このすり替えは、‘We can find no scar,’ (St. II, 1. 2)に由来するものと考えられる。霊的な光を受けた自然は、‘Heavenly Hurt’ (St. II, 1. 1)の具体的形状としての‘scar’を具現しなければならないのに、それを示すことのできない自然は、その本来の役割を捨てて、自らも人間と同じように、「耳をそば立て」なければならなくなってしまっている。これは本来の自然とは違った異質の自然を示し、話者と自然の完全な分裂を示すことになる。つまり、話者を含めた一切のものが、分離し、孤立していることを示唆し、ここに話者の意識の分裂が見られる。また、「耳をそば立てる」という表現は、明らかに、啓示、つまり、死後の永生を声として聞きたいという意志の表れである。神の意志を捉える為の人間の感覚は視覚と聴覚しかなく、光による、即

ち、視覚による永生獲得を拒否された今、話者には聴覚しかなく、これが話者に残された最後の永遠への接近法となる。従って、'listens' には、静かに息を殺して声を聞こうとする話者の姿が示されていることになる。'listens' と 'Landscape' の [1] の頭韻は、同様に、全神経を耳に集中させ、身動き 1 つしない話者の静けさを伝える。次に 'Shadows' は、この詩の冒頭 2 行で見た「斜めの光」によって作られる木の影のことである。これは、'Landscape' で表される実体としての自然と、実体ではないが実体によって作られる可視のもの、つまり、影とを合わせた人間を含む一切のものが息を殺して待っていることを表す。従って、'hold' の前の dash は 'hold' の主語が 'Shadows' だけではないことを示す為のものと考えられる。また、「影が息を殺す」('Shadows—hold their breath—') という句には、影の消滅、つまり、死の暗示がある。冬の午後の太陽は沈むのが早く、木の影もどんどん長くなって行き、やがて太陽が沈むことによって、影は存在しなくなってしまう。影の死である。従って、この連のこの 2 行目と次の 3 行目の 'When it goes,' によって、時間的経過が語られ、第 1 連の午後から、夕暮→日没→闇への推移が明確となり、生命原理としての太陽が西に沈むことによって、光が消滅することになる。この光の消滅が死の metaphor となるのである。これは第 1 連の死の metaphor とつながるもので、死後の永遠への準備、つまり、死の準備が整ったことを示す。しかし、最後の 2 行で「それが立ち去る時、それは死者の顔に浮かぶあの隔たりに似ている」('When it goes, 'tis like the Distance / On the look of Death—') と表され、最後に自然に託した望みも絶たれ、話者は究極の絶望に陥るのである。闇はただ広がり、深まり、何も見せてくれないし、何も話してくれない。これが、具体的に、しかも、みごとに「死者の顔に浮かぶあの隔たり」に表される。死者は何も語らないし、教えてもくれない。死後の永生を希求する話者の前に死は立ち塞がり、話者は絶望の淵に立たされるのである。'Distance' は、何も黙して語らない死者の顔のよそよそしさを表す語であるが、同時に、死は生を超えた不可知のものであるという話者の心理的隔絶感を生むことになる。また、この語は前連最終行の 'the Air' と結びついて、その隔たり、距離の大きさを示す。「空気」は天と地とを分ける空間を示す語だが、死後の永生を獲得できない話者にとって、この空間は大きく、天は遠い。この話者の天への遠さがこの 'Distance' に重ねられているのである。この語は具体性のある語で、話者の死に対する隔絶感を的確に捉えると同時に、不可知の死の遠さ、更に、その先にあるはずの死後の永遠の計り知れない遠さを示す。この距離感が、話者の絶望の大きさ、深さを増すことになるのである。正に、この話者の置かれた絶望の状況は 'internal difference' (St. II, l. 3) によって引き起こされたものである。

III

死と死後の永生の獲得の試みは、三度にわたって拒否され、話者はその度に挫折し、絶望の境地に陥るのだが、話者が絶望に至る直接の原因は、自然の異化にある。II で述べたように、話者の自己意識の分裂は、自然の中に神の意志を見ることができなかったという自然に対する話者の価値観の崩壊によって引き起こされたものである。これは話者の identity 喪失以外の何ものでもない。R. W. Emerson に代表されるこの時代の支配的思想の基になっている自然は神の代理人だという考え方が、もはや、E. Dickinson の中で有効に機能しなくなっている為に、話者の意識にずれが生じ、これが、内面分裂の原

因となるのである。古い価値観が崩壊し始め、新しい価値観が未だ生まれない時代の分裂が、しばしば、人間の内面を分裂させるものだが、E. Dickinson の場合のこの内面分裂は、R. W. Emerson 等のロマン派からの離脱を特徴づけるものであり、これは、彼女が modernism の先駆を成す詩人であることを示す。この意味で E. Dickinson は現代詩人であると言えよう。もう1つ話者の内面分裂の原因となっているものに、死と死後の永遠の獲得の挫折がある。Ⅱでも述べたように、キリスト教思想と時代の思想とは表裏一体の関係を成すもので、同根のものではあるが、永遠の獲得の挫折は、具体的な話者の絶望を伝えるという点で見過ごすことのできない重要な話者の内面分裂の原因である。死後の永遠はキリスト教の死生観を支える極めて重要な思想であるが、この詩に表されたように、死とその後の永遠が断絶されたことは、この死生観の崩壊を示すことになり、キリスト教そのものがこれ迄保持して来た価値観が大きく揺れていることになる。これは現代人の持つ宗教観の多様化の始まりと行うことができるであろう。Ⅱで、'Heavenly Hurt' (St. II, l. 1) は、文字通り天が傷ついているのではないと解釈したが、現代の宗教の状況を考えると、極めて暗示的な意味があることになる。E. Dickinson 自身は、勿論、キリスト教そのものの衰退を意識してはいなかったであろうが、しかし、彼女の死生観に対する ambivalent な態度そのものが、現代のキリスト教の在り方を決定することになったのである。キリスト教信仰にも、時代の思想にも異和感を覚える E. Dickinson は、自然及び信仰と自己との分裂をきたし、孤立し、絶望せざるを得ないのである。ここに、お互いに違った価値観を持ち、孤立し、identity を喪失した現代人の姿と同質のものをみることができるであろう。(この論文は、平成4年度第7回東海英米文学会での研究発表の原稿を基にしたものである。)

注

- 1) T. H. Johnson (ed.) *The Poems of Emily Dickinson*, Harvard U. Press, 1965.
- 2) 'This Pendulum of snow' [A Clock stopped— (287), St. III, l. 2] の 'snow' は死を表す。
- 3) Ralph Waldo Emerson, *Nature*, in *American Literature* Vol. 1, Emory Elliott (eds.), Prentice-Hall, 1991, pp. 1345—1373. 齊藤 光訳 「超越主義」 研究社 1975 第2章 自然
- 4) Clark Griffith, *The Long Shadow*, Princeton U. Press, 1964, chap. I. Toshikazu Niikura, *Dickinson's Poetics: "Disseminating Their Circumference" in After a Hundred Years*, The Emily Dickinson Society of Japan (ed.), Apollon-sha, 1988, pp. 34—44.
- 5) V. R. Pollak は 'Light is a traditional symbol of spiritual illumination.' と言っている。(Dickinson, Cornell U. Press, 1984, p. 218.)
- 6) E. Dickinson の詩には、本詩とは逆に、例えば *A Wife—at Daybreak I shall be—* (461) のような死後の永遠を歌った詩のグループがあるので、E. Dickinson は神の存在を信じていたと考えられる。
- 7) '... Dickinson was much too conscientious a reader of the Bible and particularly of the Book of Revelation' (Sharon Cameron, *Lyric Time*, The Johns Hopkins U. Press, 1979, p. 101.)
 '... Dickinson appropriates the language of the Book of Revelation to describe the absence of revelation.' (V. R. Pollak, *op. cit.*)
- 8) *The New English Bible*, The University Press, Oxford, 1970, p. 321.

9) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, 1976, p. 408.

山下圭一他訳 「イメージ・シンボル事典」 大修館書店 1984 p. 559.

10) *Webster Third International Dictionary*, G. & C., Merriam Company, 1981, 1 b.

11) *Ibid.*, 3.